

孫に語る歴史

第4章 中世前期

谷川 修

第4章 中世前期

4.1 ヨーロッパ、イスラーム世界、南アジア

A. ヨーロッパの再構成

ゲルマン諸族の移動

日本語のドイツという呼び名は、ドイツ人自身の呼び方からきている。イギリス人は、ドイツ人を German という。ゲルマン人と呼んでいるのだ。イギリス人という日本語の方は、English に当たるオランダ語からきていて、アングロ・サクソン人を意味する。フランス人という呼び名はフランク人を意味する。古く西ヨーロッパに住んでいた人たちを、まとめてケルト人という。カエサルが征服したガリア人とはケルト人のことだ。ローマ帝国の人々は、地理的な国境をつくるライン川とドナウ川の外に住む人々を、ゲルマン人と呼んでいた。

ゲルマン人は、おおざっぱに言うと、ライン川下流のフランク人から、東南へ順に、ブルグンド人、ヴァンダル人、ランゴバルド人、ドナウ川下流の北にいた西ゴート人と、黒海の北にいた東ゴート人に分かれていた。考古学的には、バルト海沿岸や北ドイツに住んでいた人々が広がったらしい。ローマの文明が及ばなかったはずはない。村々があり、定住して農業を営みながらも、牧畜のさかんな生活をしていたようだ。有力者と自由民とその下の下層民に分かれる社会階層ができていた。氏族

的・部族的な習慣を残して、有力者の中から王や首長が出て小さな国々を治めたのだろう。民会もあったらしい。戦時には、首長や貴族が自由民をひきいる主従的な関係があった。しかしゲルマン人たちが暮らしている地域には、首長や貴族が専有できないほどの土地があった。

ローマ帝国の支配した地域へは、征服者としてイタリア半島から多くのローマ人が来て、ローマの制度と習慣が広まる。パリやロンドンができた。イングランド(イギリス)にローマ人の好きな公共浴場もあったのだよ。それぞれ地方性が残っていただろうけれど、ローマ的な生活が普及したのだ。公用語はラテン語だった。だから、今でも西ヨーロッパではローマ字を使う。

キリスト教を国の宗教にしたローマ皇帝が、395年、二人の息子に帝国を分けて継がせた。コンスタンティノープルを都とする東ローマ帝国と、ローマを都とする西ローマ帝国である。バルカン半島から東と、その延長線上にあるアフリカのリビア東部よりも東が、兄のもらった東ローマ帝国だ。東の分が悪いように思うかもしれないけれど、その頃には経済の重心がこちら側にあったのだ。二つの帝国はそれぞれの歴史を歩むことになる。

それよりも前に、東から遊牧民のフン人が西ゴート人たちの領分に進出してきた。押し出された西ゴート人は、375年頃、ドナウ川を渡ってローマ帝国の領土へ入った。軍隊の侵入ではなく、家族ぐるみの国をあげての移住である。移住しようとした土地は、先進の人々の住むとこ

ろだ。大きな混乱なしにすむはずがない。フン人はさらに西に広がり、一時期、カスピ海からゲルマン人たちの住んでいた地域までの覇者となり、大きな動乱をもたらした。ハンガリーというのは、フン人の土地という意味だ。

弟のもらった西ローマ帝国は、彼が死ぬと支配力は弱まっていた。406年、ヴァンダル人たちが、ライン川を越えてガリアを荒らし、さらにイベリア半島から北アフリカへ渡る（429年にカルタゴを中心にヴァンダル王国を建て、ローマに承認させた）。フン人に苦しめられたブルグンド人も、同じ頃ガリアの東部に王国を築く。東ローマ帝国内に住んでいた西ゴートも西へ移動して、410年ローマ市を略奪し、イタリア半島を荒らしまわる。ローマ側は、どうにかガリアの方へ出て行ってもらおう。西ゴート王国は南ガリアからイベリア半島まで征服した。

西ローマ帝国は、“蛮族”が入ってくるのを、同じく蛮族の軍で防ぐことしかできない。その雇い兵が実権をにぎるようになる。事実上、西の帝国は国々に分裂する。東の皇帝は西に皇帝を送りこんで何とかしようとしたが、とうとう476年、蛮族あがりの“皇帝”を倒した別の蛮族の隊長が、西の皇帝の冠を東の皇帝に返した。

ヨーロッパの国々の形成

デンマーク半島あたりにいたアングル人とサクソン人は、400年代半ばに、ブリテン島のローマ領を征服する。ケルト系のブリトン人を追い出すようにして、七つの王

国を建てた。この支配地域がイングランドで、人々はアングロ・サクソン人と呼ばれるようになる。その西にケルト人のいるウェールズ地域が残された。北のスコットランドもケルト人の国として残された。ブリテン島には三つの国がある、という見方が今も続いている。

フランク人はライン川下流で勢力を広げた。その中で、ガリア北部にできた小国にクローヴィス王が出ると、フランク人たちを次々に従え、486年ローマ人の国を倒して、大きなフランク王国になった。メロヴィング朝と呼ばれるこの王権が、フランス王国のはじまりである。パリに都を定め、さらにガリアを征服していく。クローヴィスはローマ・カトリックの洗礼を受けて、ローマ人になっていたガリアの人々を服属させることになる。

混乱するイタリア半島には、東ローマ帝国をめぐって来た東ゴート人が、493年に王国を建てる。しかし60年ぐらいで、東ローマ帝国にほろぼされた。この情勢を見て、東ローマ帝国の北部に移住していたランゴバルド人が、イタリア北部を征服して、568年ランゴバルド王国を建てた。またアジアから来た遊牧民に圧迫されたのだ。北イタリアがゲルマン化されることになった。

おじいさんが長々とゲルマン人たちのことを話しているのは、西ローマ帝国の領内も、ゲルマン人たちのいた地域も、ヨーロッパ世界全体が動乱によって大きくゆさぶられ、新しい国々がつくられていったからだ。ここまでを物語の前編として、一休みしよう。

後編の主役はフランク王国である。ゲルマン人の昔の伝統からか、息子たちが分割相続しながらも、膨張の勢いはとまらず、500年代前半までに、南は西ゴート人をガリアからほぼ追い出し、イタリアと国境を接するようになる。東のブルグンド王国を支配下に入れる。この地方はのちのブルゴーニュで、ブルグンドの封建領主たちが残った。さらにライン川を東へ越えて、もともとゲルマン人の多い地方も征服した。また3分国になって、武勇を誇る領主たちの争いが続く。王たちの勢力争いの中で、領主たちも実力をつける。王と領主たちのこみいった闘争は、700年代中頃まで続く。日本の『太平記』の拡大版と言えるできごとが続いたのである。ついには、東の分国の家老職にあたる宮宰(きゅうさい)の家が、3分国の宮宰職を兼ねて、実権をにぎった。

732年、その当主カール・マルテルは、イベリア半島から北上してフランスの奥深くまで攻めてきたイスラーム軍を、トゥール・ポワティエの戦いで破った。カールというのはゲルマン(ドイツ)語読みで、フランスではシャルルのことだ。覇者となった家の息子ピピン3世は、メロヴィング朝の王を追放して、フランク王となる。それを支持したローマ教皇へ、イタリア中部の一地域を奪って寄進した。ローマ教皇領のはじまりである。その息子カール(シャルルマーニュ)は、妻の家であったランゴバルド王国を倒して併合する。教皇領も広くした。フランク王国の東(ドイツ)を征服していき、東南部のオーストリアまで領土に加える。さらに領国の外まで遠征し、勢力はイベ

リア半島をのぞく西ヨーロッパ全体に及んだ。800年、ローマ教皇は、カールに西ローマ皇帝の冠を贈る。この王朝を、カール大帝の名をとってカロリング朝という。

フランク王国には分割相続の伝統が残っていて、騒動が起きる。843年、カール大帝の孫の代の兄弟3人が、ヴェルダン条約をむすんで、王国を3分した。しばらくすると、中王国からイタリア北部の王国が分立し、残りを東西の王国が分けあって、870年メルセン条約をむすぶ。東西二つの王国の国境は、ほぼ言葉の境界に近かった。のちのフランス・ドイツ・イタリアの原型ができた。こうして、王と封建領主たちの長い闘争を経て、ヨーロッパ世界のおおよその輪郭が形づくられた。

フランス・イベリア半島・イタリア半島では、征服者が人口に占める割合が小さかったから、ラテン語の影響の残る言葉になった。東のフランク王国(ドイツ)では、ゲルマン語が話される。イングランドの言葉は、征服者のゲルマン語系だ。スカンディナヴィア地域には、ゲルマン人たちが残った。もちろん言葉はゲルマン語系だ。ケルト人は、ウェールズ・スコットランド・アイルランドと、フランス西北部のブルターニュで、言葉を残した。以上の地域には、ローマ教会のキリスト教が広まった。

ゲルマン人たちの去った東部では、アジアから来た遊牧民は舞台から退場し、スラブ系の人々が現われた。今のチェコから東でスラブ語系の言葉が話されている。その東ローマ帝国の影響力のなかった北部、のちのハン

ガリー以北の国々に、西ヨーロッパの影響が強い。ローマ教会の伝道者が向かった。東ローマ帝国のことはあとで話すとして、そこにもスラブ人たちが移住したのだ。東ローマ帝国で重要な地位を占めたギリシア人たちの地域は、ギリシア語の国として残り文字も保った。

ヨーロッパの封建制

西ローマ帝国に侵入したゲルマン人たちは王国を建てた。移動しているゲルマン人の集団は軍事的にまとまった規模で、これに対して、ローマ領内のそれぞれの地方に対抗できる軍隊がなかったのだろう。皇帝の支配する軍事組織が弱まっていたことを物語る。ゲルマン人たちは、征服者として先進の社会を支配することになった。その支配体制は、戦争のときにゲルマン社会に以前からあった主従関係に基づいている。まず王が、そして部族長などの有力者が、大きな領地を得ただろう。王や有力者たちは、その領地の中から、それぞれの部下に領地を分配する。さらにその下もあるだろう。

この主従関係がヨーロッパの封建制になる。契約の言葉で語られることが多い。上層貴族になる領主は、王からその地位を認められる。下級の領主や騎士は、彼らの領地上層貴族から認めてもらう。その代り、戦争のとき、領地の領有を認めてくれた主人に従軍する義務がある。ヨーロッパに似た封建制があったのは日本だけだ。鎌倉幕府の御家人は、将軍源頼朝から領地を承認する書付けをもらい、将軍の指揮の下に入る。「いざ鎌倉」の

ときには駆けつけるのである。ヨーロッパでは、領地を別の主人からもらえば、服従の義務をもつ主人が複数になることもあった。もちろんこの主従関係は、利害関係によってゆがめられる。500 年間、王と貴族たちの利害をめぐる闘争があったのだ。

封建的な支配者の地位は、戦争で戦うことによって保障されている。王は馬上に立つ者として支配するのだ。ヨーロッパでも日本でも、武勇を尊ぶ精神文化が形成された。騎士道物語はそういう中で生まれた。江戸時代の武士道というのも、そういう精神をひき継いでいる。

領地というのは、耕作者のいる土地のことだ。かつてのローマ市民たちは、働いてゲルマン人の領主に年貢を納めなければならない。ゲルマン人の領主はそれで食べていく。状況にうまく対応して領主になった先住の人々もあっただろうが、西ヨーロッパの騎士以上の多くの古い家柄は、ゲルマン人の子孫だということになる。ゲルマン人たちが国々を建てた初期には、各地でずいぶんひどい目に会った人たちがいたことだろう。それでも、支配者は少数だから、混血は進む。たとえば、フランク人の支配したガリアでは、言葉が支配されていた人たちのそれに近づき、人々がみなフランス人になる。

ローマ帝国に入っていなかった地域の社会は、違っていただろうけれど、封建的な主従関係による支配という点で同じである。そこにできた王国も、西の進んだ地域を見ながら、似たような国々をつくっていったのだろう。

ヨーロッパ中世の経済は、人間と土地とを支配する封建制に基づいている。実際には、ローマ帝国時代の土地制度があったのだし、経済はそれまでの文明にふさわしいほど発展していたのだから、経済的な利益を求める複雑な動きがあっただろう。かつてはローマ帝国に入っていなかったドイツ東北部は、少し遅れながら、西にできつつあった経済に似たものになっていったのだろう。

中世ヨーロッパの村である荘園のひながたが、教科書で絵にしてある。領主の館と農民の家々があって、まわりに耕地や牧草地や放牧地がある。教会や共同で使用する施設も描いてある。共同施設の管理権は領主がもつ。麦類を3年サイクルで栽培することが普及した。春に植えたのを収穫すると、次の年の夏まで休ませ、今度は秋に植える。村は耕作地を共同体のように運営したらしい。領主は、自分の領地に住んで荘園を経営した。近世になってセルバンテスは、『ドン・キホーテ』で中世の騎士をパロディ化して描いたが、ドンは敬称で、ドやフォンのように領主の身分を表わしていた。そのあとにモンテニユというような城の名や人名がくる。『平家物語』で熊谷の次郎直実と名乗るのもそのやり方だ。

ヨーロッパの村を思い描くのに、「ミス・マープル」や「名探偵ポアロ」のドラマがヒントになるかもしれない。探偵が泊まる館や訪れる教会は古びていて、昔風の村の風景が映し出される。近代イギリスが舞台のドラマで、映される館や教会は後世のものだろう。中世の村は、この映像よりもさらに古びたものを想像しなければなら

ない。農家は土壁かなにかの木造で、日本の昔の家とひどく違ってはいなかっただろう。名探偵と登場人物の多くは中流階級に属しているが、使用人や村人は貧しそうだ。中世の階級差はずっときつかったはずだ。村には、領主が戦争に出るときに、従士として従う比較的上層の農民がいただろう。下級領主のドン・キホーテは裕福にはみえない。従士もサンチョだけだ。莊園の絵はのどこに見えるけれど、農業の生産高は少なかったから、生活はもっとつつましかったと思わなければならない。

ローマ・カトリック教会

キリスト教の中で、ローマの教会は由緒ある地位を占めていた。首都が東に移り国の宗教とされると、コンスタンティノーブルの東方教会が強くなったが、ローマ帝国が東西に分かれると、自立した地位を得ることになった。400年代にゲルマン人が侵入し、西ローマ皇帝がいなくなる混乱した事態になっても、その地位を保った。アウグスティヌスのような信仰の人が出て、カトリック教会の考え方が整えられる。さかんに伝道がおこなわれ、ローマ教皇の指導権が強くなっていった。800年にローマ皇帝の位をカール大帝にさずけたことは、教皇の権威が確立する出来事だった。ローマ・カトリック教会が、東ローマ帝国の地域をのぞくヨーロッパの歴史で、大きな役割を果たすようになる。

封建制の初めには、経済をにぎる領主が教会を建てて、司祭の任命権をもっていた。他方で、ローマ・カトリッ

ク教会は、各地の教会の司教を序列のある組織に組み入れ、ヨーロッパに強いネットワークをつくっていく。時とともに教会の領地が寄進によって増えていくと、教会組織を支配する教皇と王権との対立が生じるようになった。その対立がその後の歴史をいろどる。

二度目の波乱

800年代になると、スカンディナヴィア地域のノルマン人が外へ動き出す。ヴァイキングだ。ヨーロッパの沿岸地域を略奪して生活をたてた。大型船ではないけれど、竜骨のある性能のよい船で、外海を航海した。ノルウェー人は、ブリテン島やアイルランド島の沿岸部に住みついて根拠地にする。アイスランドを発見し、コロンブスよりずっと以前にグリーンランドと北米に達していた。デンマーク人は、東フランク王国では成功しなかったが、西フランク王国の北西部に大きな根拠地を築いた。船底の浅いその船で、セーヌ川を内陸部までさかのぼり、パリのあたりも略奪する。900年代になって、西フランク王がノルマン人のかしらをその地の公(こう)に封じて、やっと落ちついた。今のノルマンディー地方である。デンマーク王は、1000年代前半、昔デンマークの方から来たアングロ・サクソン人の国イングランドを征服したが、まもなく追い出された。スウェーデン人は東南に向かい、キエフ・ロシア地方の国の形成にかかわった。

ノルマンディー公が西フランク王国で封建領主になっ

た頃、東フランクのカロリング王家が断絶した。新しい王は諸侯の推薦で選ばれた。息子のない国王は次の国王を指名し、その血統の王が続くことになる。900年代中頃のオットー1世は、教会組織とむすんで王の権力を強める政策をとり、ローマ教皇から皇帝の冠をさずけられた。それで、東フランクの領域を神聖ローマ帝国と呼ぶ。しかし、実態は大小の封建領主の国々の連合体である。

西フランクでも、封建諸侯の争いの中で、王の力は弱まっていた。ノルマン人から昔の首都パリを守ったパリ伯は、800年代末に西フランク王になったが、カロリング王家の子孫と争いが続く。987年カロリング家が絶えると、パリ伯ユーグ・カペーが諸侯と司教たちに選ばれて、フランス王位についた。これ以後フランス革命まで、このカペー家の血筋の者が王となる。900年代末のフランスも分立状態で、カペー家は一領主にすぎなくて、大領主たちは名目的な王を任命したと思っていただろう。王の臣下であるという封建制の名目が、やがて自分たちの子孫を服従させることになると、誰が予測できたろう。

900年代になると、ドイツの東にスラブ人の王国がで始める。ドイツは、それに対抗して辺境領をつくり、年月をかけて国境を東に広げていった。紀元1000年、ハンガリー平原のスラブ人を征服したアジア系のマジャール人の王が、ローマ教皇から王冠をさずかった。

イベリア半島は、700年代半ば以来、ジブラルタル海峡を渡ったイスラームの王朝が大半を支配した。ここでの中世は、ヨーロッパ人の長い国土回復の戦いであった。

ビザンツ帝国

東ローマ帝国は、悩まされたゲルマン人が西に去って、国の解体をまねがれた。500年代中期に、ユスティニアヌス帝が出て、東ローマ帝国を一時期強大にした。ゲルマン人の東ゴート王国とヴァンダル王国を倒して、イタリア南部と北アフリカを領土に加える。内政では、それまでのローマ法を集大成して『ローマ法大典』にまとめた。後世のヨーロッパは、ローマ法をお手本にして法律をつくることになる。中世に生き残ったこの国を、ビザンツ帝国と呼ぶ。守護人として東方教会を配下におく皇帝は、コンスタンティノープルにハギア・ソフィア聖堂を建てた。ビザンティン建築を代表する建物である。文化面では、ギリシア古典の教養が重んじられた。

皇帝の血筋の者がずっと支配するのではなく、つぎつぎに帝位を奪われて、殺される皇帝もあとを絶たなかったのに、おどろくほど長く国家は続いた。世襲的な貴族層は形成されなかったが、首都に出来上がった官僚制が、中央集権的な体制を保ったのである。時代ごとに爵位(しゃくい)をもらう者たちがいて、宦官(かんがん)もいた。西ヨーロッパにくらべて、商工業がさかんで貨幣経済が進んでいた。官位を売り、請負制で税を集めたりした。

長く続いたビザンツ帝国は、いく度も困難に出会う。西アジアでササン朝ペルシアが強大になる。バルカン半島にはスラブ人が来る。次にはイスラーム帝国が出現する…。そのたびに、帝国は小さくなっていく。

B. イスラーム世界の形成

前史

アレクサンドロスのあとのセレウコス朝シリアの東で、イラン東部におこったパルティアは、セレウコス朝がローマとの争いに悩まされるようになった紀元前 100 年代半ば、イラク(メソポタミア)まで征服し大国になった。シリアがローマに征服されると、ローマと対決するようになる。カエサルのライバルだった人物を討ち、アントニウスを撃退するほどであった。都はイラクの中心部にあり、ローマ帝国はそこまで進出できなかった。漢が西域を支配して、存在を知った安息とはこの国である。

200 年代前半、ペルシア地方からまた、ササン朝ペルシアが出て帝国を建てた。パルティアの都をそのまま首都とする。東はインドのクシャーナ朝を倒し、ローマ帝国の支配する地中海の沿岸をのぞけば、かつてのアケメネス朝に近いほど領土を広げた。ギリシア人による中断をのぞいて、イラン系の人々の長い支配は西アジアに影響を残しただろう。ローマ帝国は負けたり勝ったりした。ここでも権力をめぐる闘争があったけれど、王が力を強める時代もあって、600 年代まで帝国を保つ。火を崇拝するゾロアスター教が国教とされた。しかし、ヨーロッパ文化の影響もあったし、ローマ帝国に近い北部のアルメニアにはキリスト教が伝えられた。東のインドや中国との交流もあった。遠く古代日本にペルシアの文物が伝わる。ガラス工芸品などが正倉院の宝物になっている。

イスラームの出現

400年間西アジアでは、東ローマ帝国とササン朝ペルシアが競争して、まわりに国と呼べるほどの王朝はなかった。けれども、東西遠くまでつながる陸上交易はさかんに続いていた。2世紀にローマ皇帝が後漢へ使者を送った海上交易も、なくなったわけではない。文明中心の近くにあったアラビア半島でも、砂漠が広く国として大きくならなかったが、人々は交易に参加した。君たちは、月の砂漠を行くらくだの商隊を思い浮かべるかもしれない。紅海に近いメッカには、国際交易をおこなう隊商がいて、神を祭るカーバ神殿があった。

610年頃、その地のムハンマドが、預言者として活動を始めた。その教えは交易のさかんな都市の宗教だ。ユダヤ教やキリスト教の流れをくみ、新旧の『聖書』を尊び偶像を禁止する一神教である。『コーラン(クルアーン)』は、ムハンマドの受けた啓示を集めたものだ。メッカの伝統的な宗教と対立して、迫害された彼と70人あまりの人々は、少し北の都市メディナにのがれた。ここにいたユダヤ教徒やキリスト教徒と敵対的ではなかったが、しだいに独自の儀礼をつくりだし、イスラーム教が生まれた。ムハンマドの指導するメディナのアラブ人たちは、630年メッカを征服した。これ以後、神アッラーを祭るカーバ神殿は、イスラーム教徒(ムスリム)の聖地となる。

ムハンマドは、アラビア半島の諸部族を圧倒し、イスラーム教を受け入れさせる。教徒の寄付であったものは、強制的な税になっていく。ユダヤ教徒やキリスト教徒か

らは、初めから人頭税を取った。632年ムハンマドが死ぬと、後継者が宗教と世俗の最高権力者となって、支配権を受け継いだ。この首長をカリフという。ムハンマドの代理人として権威をもった。カリフに指導されたアラブ人たちは、アラビア半島の外へ征服を始める。ササン朝ペルシアとビザンツ帝国から、イラク・シリア・エジプトを奪う。651年、ついにササン朝ペルシアをほろぼした。

アラブ帝国

ところが、宗教的な指導者たちも支配を争う。シリアに派遣されていたムアーウィヤが力をつけ、ムハンマドのいとこの第4代カリフが死ぬと、661年カリフになる。位を息子に継がせて、ここに世襲的なウマイヤ王朝ができた。都はシリアのダマスカスに置かれた。世俗的な傾向をもつカリフが支配権を強くすると、アラブ人の帝国の膨張がまた始まる。700年を過ぎると、東はサマルカンドを越え、インダス川まで征服する。西は北アフリカを進み、ジブラルタル海峡を渡って西ゴート王国を征服した。732年、カール・マルテルの指揮するフランク軍は、このウマイヤ軍と戦ったのである。アラブ人たちは、ローマ帝国にくらべられるほどの領土を得た

征服の原動力は何だったのだろうか。ムスリムたちの宗教的な意欲が考えられる。他方で、征服された地域は、すでに何度も大国の支配体制に組み入れられて、土着の部族たちが強い勢力をつくりだす条件がなかったのだろうか。アラブ帝国は、独立心に富んだアラビア遊牧民を

征服の利益に誘って、遠征に向かわせたらしい。部族の連合体から始まった支配体制は、征服した各地域に勢力をはった者たちの連合した帝国のようになる。

アラビア半島から出たアラブ人征服者たちは、アーリア人がインドに侵入したように、特権的な身分として異民族を支配した。『コーラン』は、セム語系に属するアラビア語で書かれている。その言葉と文字が、モロッコからイラクまでの国々で使われるようになる。イラン人の勢力の強いところだけは、ペルシア語が保たれて今日に至っている。征服された地域の人々は、イスラーム教徒になることを強制はされなかったようだが、地租と人頭税を払わされる。

イスラーム帝国

ウマイヤ朝に対して、イスラーム教団の国家にしようとする思想が生まれると、ムハンマドの叔父アッバースの子孫が主導権をにぎって、それを運動に高めた。750年、ウマイヤ王朝を倒してカリフになる。アッバース朝のはじまりである。アッバース朝は、イスラーム教の原理で国家を治めた。カリフは、宗教的な権威を合わせもつ独裁君主となる。王朝の軍団と官僚たちの制度が整えられる。都はイラクのバグダードに築かれた。長くイラクで力をもったペルシア(イラン)人などを官僚に登用し、奴隸的身分のテュルク人などで軍隊を組織した。テュルク語系の言葉を話す人々は、あとで出てくるだろう。

イスラーム教には、原則的にキリスト教のような聖職

者がいない。しかし、イスラーム教を学ぶ神学者などが教えの体系を整理し、そのほかの関係者も宗教指導者となる。正統派とされるスンナ派が形成されていった。これに対抗して、ウマイヤ朝の前の第4代カリフの子孫を中心とする勢力があった。この人々は、イスラーム教の中でシーア派と呼ばれる分派を形づくる。今でもスンナ派とシーア派との対立が尾を引いている。

アッバース朝になると、征服された人々も、イスラーム教に改宗すれば地位を向上できた。年月が経てば人々はイスラーム教徒になる。北アフリカのモロッコから東のパキスタンまで、今ではイスラーム教徒だ。その宗教と言葉が、帝国のどこにもしみわたる。イラクから西の人々はアラブ人となった。

イスラーム世界は、古代からの西アジアの遺産をひき継いだけでなく、ギリシアとローマの残したものも受け継いだ。ギリシアの古典がアラビア語に翻訳され、ギリシアの学芸がイスラーム世界に吸収される。王朝のできた翌年751年には、国境を接する唐と、中央アジアのタラス河畔で戦い勝利した。シルクロードから地中海・北アフリカまで、東西に交易路が伸びて、都のバグダードは世界一の都市として発展する。中国から紙の製法が伝わり、東南アジアの香辛料まで取り引きされたことが、その広がりを知る。農業の発展が商業を支えたようだ。中世のイスラーム世界は、経済的にも文化的にもヨーロッパよりも優勢だったのである。

化学・天文学・医学など諸科学が発展した。ギリシアの数学を受け継ぎ、インドの数学が伝わって、アラビア数学が発展した。君たちの書く数字はアラビア数字だね。10進法でたとえば2005年と書くやり方は、メソポタミアに起源があるらしい。その位に数がないということを表わす記号がゼロだ。これがインドで発展して、イスラーム世界に來たのだ。インド人は、数を0から数え、初めて10と表わす方法をあみだし、0を含めて計算できるようにした。2008をローマ数字で表わすのはめんどろだ。中国語は数を発音するのに簡単だけど、計算はそろばんなどの道具を使う。ヨーロッパでも中国でも年代を数えるのに1から始める。だから、900年代を10世紀と言ひ、中国でも日本でもかぞえ年で年齢を数えていたのだ。アラビア語では、文字は右から左に読むのだけれど、数字は左側から読むのだそうだ。

アリババの「開けゴマ」の呪文(じゅもん)を知っているね。『千夜一夜物語』がアラビア語に翻訳されたのはこの時代だ。ササン朝ペルシアの時代に、インドの物語などからたくさん話ができて、ペルシア語で書かれていたらしい。

イスラーム帝国の分裂

アッバース朝に倒されたウマイヤ朝の子孫の一人は、イベリア半島に逃げて、数年後そこに、後ウマイヤ朝を建てた。900年代に入ると、北アフリカにシーア派のファーティマ朝が成立する。この二つの国の王もカリフと名

乗り、3国が分立する状態になった。これ以前に中央アジアは離反していた。アッバース朝の支配がゆるみ、財政が困難になっていくと、軍人が実権をにぎるようになる。イランで自立したシーア派の王朝が、945年バグダードを落とす。しかし勝利者は、イスラーム教でのカリフの権威を利用するために、アッバース朝のカリフがハグダードとその周辺を支配することを認めた。ここに、宗教的な権威者であるカリフとは別に、軍事力で支配する世俗的な王が現われた。

税と財政の混乱の中で軍人を引きとめるために、イスラーム世界でも、給料ではなく領地を支給するようになる。しかしその体制は、ヨーロッパの封建制とは違っていた。領地を与えられて、王に服従する義務があるという考えは育たなかった。1000年頃から興亡をくりかえした王朝の名を、おじいさんは言えない。イスラーム世界は経済的に優勢であり続けるが、現代からふり返ってヨーロッパとくらべたら、国家的なまとまりを破壊する征服が、社会の進展をさまたげたように見える。

イスラーム教は、イスラーム帝国の領土を越えて伝わった。中央アジアにはテュルク語系の言葉を話すテュルクの人々がいるが、その全体にイスラーム教が広まった。今のトルコ人もその系統に属す。また、パキスタンからインド東部へ、さらに海上交易路を通して東南アジア沿岸部のマレーシアとインドネシアにまで広がった。

C. インドと東南アジア

中央アジアで400年代に登場したエフタルは、500年代に強大になって、一時北インドに侵入する。衰えつつあったグプタ朝は、550年頃ほろびた。インドは、これ以後およそ500年間、小国が分立する状態になる。600年代前半ハルシャ・ヴァルダナという王が、一時期インド中部に大きな国をつくった。唐の僧玄奘(げんじょう)が仏教を求めて来たのはこの王のときだ。玄奘は、この王国の外もめぐって、多くの仏教経典を集めて唐にもどる。出国の禁止令をやぶっての足かけ16年の旅だった。帰国後は経典の翻訳をして、君たちの知っている三蔵法師と呼ばれるようになった。仏教の経典や哲学書の三種に通じた僧という意味だ。

500年間も国々の分立した状態だったインドで、カースト制度が組みこまれた村々ができていったようだ。仏教は衰え、ヒンドゥー教の社会ができた。長い分立によって、多数の言葉がそれぞれの地方に根づくことになった。その影響は現代まで残る。

紀元1000年から200年あまり、アフガニスタンにおこった2代のイスラーム王国が、北インドのパキスタンあたりを支配下においた。初めはテュルク系の王朝で、次はイラン系の王朝であった。後者は、一時期北インドの奥まで侵入した。これ以後のインドに、イスラーム教徒の支配が及ぶようになる。

インド南部は、アーリア系の人々が浸透しなかったの

で、ドラヴィダ系の人々が歴史をつくっていった。紀元前の大国マウリヤ朝のときにも、半島の先端部は支配されなかった。それ以後、広いインド南部で、いくつかの国に分かれた状態がつづいた。半島南部のチョーラ朝が、1000年代に大きな国になったが、そのときにも、対立する王朝がなくなったわけではない。言いたせば、インド南部もヒンドゥー教の社会だ。

南インドは、西アジアと東南アジアの中間に位置して、海上交易で重要な立場を占めた。この人の流れに乗って、小乗仏教が東南アジアへ伝わった。仏教は、ガンジス川流域から陸伝いにも、東南アジアへ向かった。その流れには大乘仏教も含まれる。インドネシアのジャワ島にあるボロブドールは、美しい造形で有名だ。800年頃つくられたものらしい。建物は大乘仏教の思想を表現している。東南アジアの見事な遺跡と言えば、カンボジアのアンコールワットがある。こちらは、1100年代に、ヒンドゥー教寺院として建てられたものだ。インドとの交流が深かったことを示している。のちにカンボジアで仏教が支配的になると、仏教寺院にされた。マレーシアとインドネシアをのぞく東南アジアでは、今でも小乗仏教がさかんで、托鉢(たくはつ)をする僧の姿が見られる。

白状すれば、おじいさんは東南アジアのことも知らない。それぞれの地域で王朝が興亡をくりかえしたようだ。その文明と文化は古い、ということだけは知っていなければならない。

4.2 東アジアの枠組み、日本の古代後期

A. 中国の再編成

漢の終わり頃には、儒学を学んだ豪族も貴族層に加わり、政治・経済・文化を主導した。地方の村々の古い行政のしくみはうまく働かず、一族をまとめた豪族が人々をひきいる社会に変化しつつあった。こういう社会状態の中で、政治的・軍事的な変動が生じて、人々はそれに立ち向かうことになる。

三国時代、曹操の子が皇帝になった魏は、先進の中国北部(華北)を領有し、三国の中で最も強かった。将軍司馬懿(い)は、蜀の名将諸葛亮(しょかつりょう、孔明)によく対抗して功があった。司馬氏は魏の実力者となり、蜀をほろぼした息子は晋王をさずかった。次の代の晋王司馬炎が、265年、魏の皇帝から帝位を奪う。晋帝国のはじまりである。280年、呉を倒し中国を統一した。

魏に帝位を譲らせて成立した晋は、魏の制度をひき継ぎ発展させる。官僚を上下9段階に位置づけて行政組織を整えた。世襲を認める私有地の占田(せんてん)と、国有地を農民に貸し与える課田(かてん)とを決めて、税収を安定させようとした。これらの制度は、政治の不安定な晋で定着する時間がなかったが、のちの王朝にひき継がれることになる。地方の豪族が官僚になる場合が多く、世襲の貴族制が色濃くなっていく。

10年もすると、愚かな息子が皇帝を継ぎ、悪い皇后が出て宮廷で権力争いが始まると、軍隊を配下にもつ皇族

八人の思惑のいりまじる内乱が 15 年も続く。

北方諸族による中国北部の支配

漢帝国の領土拡大によって、周辺の遊牧・狩猟生活をしていた諸民族が、中国文明に組み入れられていった。彼らが漢人の居住地に入ってくることを許し、移住させることまであった。晋の頃には、多くの異民族が、中国北部や西部に入って村々をつくり定住生活をしていた。漢化されながら、少数民族として圧迫も受ける。八王の乱では彼らの兵力も利用された。その中の匈奴の族長が、混乱に乗じて山西省に国を建て自立した。304 年のことである。まもなく後漢以来の都の洛陽が落ちる。晋の皇帝は捕えられて、宴席で酒をつがされるという屈辱をなめ、のちに殺された。長安にいた皇族が帝位についたが、同じ運命をたどって、316 年晋はほろんだ。

中国の歴史で五胡十六国と呼ばれる時代が始まる。胡というのは、中国から見た“蛮族”のことである。匈奴とその一派の羯(けつ)が山西省やその西に、チベット系の氐(てい)・羌(きょう)が陝西省(せんせいしょう)とその西にいた。もともと長城の外の東北部にいたモンゴル系の鮮卑(せんび)が、この頃は長城一帯に広がっていた。これら五つの異民族が、華北につぎつぎに 16 の国を建てる。

中国を混乱に落としこんだ五胡は非漢族であった。中国の北半分の漢人たちは、異族の支配を受けることになったのである。南にいた晋の皇族の一人が、南に逃げてきた漢族と地元の有力者たちの助けを得て、王朝を建て

た。東晋と呼ばれるその南朝の話はあとでしょう。一時、氏族の一派が華北を統一し、安定するかと見えた。ところが、皇帝の野心が東晋征服へ向かわせる。383年、淝水(ひすい)で南北の決戦がおこなわれた。東晋は勝利して、中国南部(華南)は国を保つことになる。北では、氏族の王朝がほろび、諸民族の帝位獲得の戦争がまた始まる。華北の統一に成功したのは、鮮卑族の拓跋(たくばつ)氏であった。439年のことである。国名を魏というが、前代の魏と区別するために、ふつう北魏と呼ぶ。これから、南北朝の並び立つ時代が150年間続く。

異族の王は、昔の部族連合的な体制によって、国を軍事的に支配した。しかし、漢族社会を支配する皇帝という役割の方がより重要である。その行政は上層漢族を登用しておこなわれた。439年に華北を統一した北魏は、部族連合的な体制を変えて、漢人の貴族層を用いる。第6代の拓跋宏(孝文帝)は、494年、都を長城付近から洛陽に移し、中国化をおし進めた。姓と名を漢人風に変え、言葉や風習なども中国化する。晋の制度をひき継ぎ、土地制度に均田法を採用するなど、次代に影響を残した。

五胡がいれ替わりながら王朝を建てたのに、途中で対抗する漢族の政権ができなかったのは、反抗ができないほど漢族の組織がくずれていたのだろう。異民族による支配は、社会に大きな混乱をもたらしたにちがいない。現代の動乱でも見られるような、より安全な地方への大きな人口の移動があったようだ。戦乱をさけて、豪族が

民衆をひきいて新しい村を開き、そこに流民が加わることで生じた。とくに華南への亡命者が多数出た。人数は分からないけれど、朝鮮半島や日本列島に亡命した人々もあっただろう。田畑を均等に配分する均田法は、混乱する社会で、租税を増やすための方策だったのだろう。征服者の王朝だからできたことなのかもしれない。

非漢族による華北の支配は、ゲルマン人による西ローマ帝国への侵入に似ている。ただ、漢族はその文化を失うことがなかった。言葉は発音などに影響を受け、南北方言の違いが大きくなっただろう。しかし、表意文字の漢字は変わらず、書き言葉はそのまま残った。大きく見れば、中国文化は異質なものを融合して成長したと言える。五胡は、巨大なるつぼに入りこんで、融合されたのである。やがて、これらすべての人々は漢族になる。

南朝

317年、晋の最後の皇帝が匈奴に殺されると、司馬懿のひ孫で長江下流域の軍事権を与えられていた司馬睿(えい)が晋の皇帝に立った。呉の都があった建鄴(けんぎょう、今の南京)に都を置いたので、東晋と呼ぶ。北から亡命してきた豪族と南部の豪族が支える政治体制であったが、先進の華北から来た貴族が主導権をもった。

豪族だけでなく多くの亡命者が、集団的に南部に移住した。それらの人々は、もともとあった社会に隣りあうように村々をつくった。華南でも、北部の人々の流入によって、文化的な融合が生じたのである。人口の増加と

水田の開発が、農業の生産を高めた。それまでの中国の政治的・経済的な中心は、陝西省と洛陽から東へ広がる東西の平原にあった。この南朝の時代に、中国南部の重要性が高まるようになる。

北の異民族の建てた国に対抗するために、強力な軍隊がつくられた。その中の北部からの移住者中心の軍隊が、383年の淝水の戦いで勝利をもたらした。軍閥(ぐんぼつ)と呼ばれる軍事的集団の力が強くなって、王朝をゆるがす。420年、政敵を倒し外敵に勝った軍人が、東晋から帝位を奪って宋王朝を建てた。そのあとも数十年おきに、同じような王朝の交代劇があった。いずれも名門の貴族でない者が王朝を始め、それまでの貴族たちの支持をとりつけるというような政治の状態だった。

結局、東晋・宋・斉・梁(りょう)・陳の5代の王朝が入れ替わり登場した。いずれも帝位を譲らせて国を建て、都は今の南京にあった。呉から数えて六朝(りくちょう)という。梁は一時南朝で最も栄えた時代をつくり出したが、末期に北から侵入されて衰えた。あとを奪った陳の領土はずいぶん小さくなっていた。

魏晋南北朝時代の文化

この時代の貴族階級は教養ある人々が多く、人格を誇ろうとした。あの曹操は兵法書『孫子』を編集するほどだったし、二人の息子とともに初期詩人としても数えられる。五言詩・七言詩は、この頃から発展する。この時代になると、文化は政治を離れた広がりを見せる。儒教

にこだわらず、人間中心的な思想が生まれた。竹林にひきこもり人生を論じた七賢人は、そういう傾向を代表している。すぐれた詩と文がきそわれた。東晋の時代に、陶潜(陶淵明)や謝靈運などの詩人が現われ、のちの唐の詩人たちに影響を与えた。おじいさんは陶潜の味わい深い詩が好きだ。東晋の王羲之(おうぎし)の名高い書「蘭亭の序」は、別荘に四十人もの名士を招待し、曲水の宴で詠まれた詩を集めてその序を書いたのだ。酒に酔って書いた最初の書きそんじのある方が、清書よりもよいとしてそちらを残した。唐の皇帝が愛着して自分の墓にまで持っていき、真筆が失われたという話もすごい。

南北朝時代に、民間宗教の道教が形を整え、仏教が中国に根づき始めた。西域の僧が活躍し、法顕がインドに旅して、仏教経典の漢訳が進んだ。インドからダルマが来て禅宗を開いたのもこの頃である。山西省の雲岡石窟は、北魏の都があった大同市の近くにある。都が洛陽に移ると、今度は龍門石窟がつくられた。敦煌(とんこう)石窟も北魏の時代からつくられ始めたらしい。儒教に加えて道教や仏教が、中国の思想に影響を与えるようになる。

隋と唐の帝国

北魏が洛陽に移る以前にいた北方には、部族長たちが国境の防衛のために配置されていた。王朝の漢化政策でとり残された彼らが、不満を爆発させて反乱が起こった。そして軍閥のあいだの戦いで、北魏は東と西に分裂する。反乱の起きた北方の出身である二人の将軍が、北魏拓跋

氏の皇帝をそれぞれ立てたのだ。二人の次の世代はそれぞれ帝位を奪い、齊(北齊)と周(北周、都は長安)という王朝を建てる。北周の第3代武帝は、巧みな政策と軍の増強によって、577年、北齊をほろぼして華北を統一した。

北周の宇文氏には、王朝の成立に協力した二人の功臣があった。同じ北の軍団に属していた李氏と楊氏である。李氏は唐国公の位に、楊氏は随国公の位につく。3氏の跡継ぎたちはそれぞれ、別の有力者の3姉妹を妻にした。第3代武帝は弟だったが、息子の皇后には楊氏に生まれた娘が選ばれた。ここにドラマが生まれる。

581年楊堅は、娘のむこである北周第4代皇帝から帝位を奪い、隋王朝を建てる。589年には、南朝の陳をほろぼし、中国統一をなしとげた。隋は、もとの長安のそばに新しく大規模な都を建設し、支配体制を整えるために行政と軍の組織を改めていく。それまで世襲化をゆるしていた官僚制度に、試験によって選抜する科挙の制度をとり入れる。行政区画を州と県の2段階に整理し、中央から長官を派遣するのに、一つの場所での在職年数を短くした。漢代からの郷里制も見直す。これらの代表例をはじめとして、それまでなかったほど整えられた中央集権的な制度がつくり出された。

第2代楊広は、江南の杭州から北京までつながる大運河を改修・建設する。それは、南朝時代に生産力のあがった華南を華北と結ぶ大動脈となつて、経済を発展させる。北と西へ領土を拡大した。東北で強大になった高句

麗(こうくり)を攻めたが、こちらは成功しなかった。野心的な大事業と戦争は大きな負担になり、国を強圧的に支配した(死後、楊帝(ようだい)というあだ名をつけられる。ちなみに後漢最後の皇帝は献帝)。やがて各地で反乱が起きてしまう。

隋王朝に対する反乱が広がったとき、皇帝の楊広は江南に逃げた。楊広のいとこの李淵は、反乱制圧の将軍として山西省にあった。その李淵が、息子たちの意見をいれて兵をあげ、長安に入城して楊広の息子を皇帝に立てる。まもなく江南にいた楊広が殺されると、618年、唐王李淵は皇帝になった。唐は7年かけて動乱を平定する。その戦争で最も功績のあった第2子の李世民が、626年、兄と弟を殺して帝位を自分のものにした。

各地に拠点をおいて対抗した軍閥を、あらためて軍事的に平定した唐帝国の支配は、統一を受けいれる気分について安定する。李世民(唐の太宗)の治世は、貞観の治とたたえられることになる。政治体制は、ほぼ隋のものをひき継いだ。律令制度と呼ばれる。行政組織は、先に話した隋のものに似ている。土地法は、北魏以来の均田法を修正して、農民や職業人の男に口分田(くぶんでん)を与え、官僚などに永業田(えいごうでん)を支給した。税は租・庸・調を徴収し、府兵制とよばれる徴兵制によって兵を集めた。実際には私的な荘園があったし、口分田などが小作地化するのをふせげなかったようだ。均田法は、600年代の終わり頃にはくずれ始める。

鮮卑族の北魏が中国内部に入りこむと、北方には別の

遊牧民が登場し、隋・唐の時代には、テュルク語を話す突厥(とっけつ)に替わっていた。唐はその突厥をほろぼす。西域でも、敦煌よりも西のトルファンまでを征服する。唐の覇権は、朝鮮半島の北からモンゴル平原・アラル海までの広大な地域に及び、北部ヴェトナムも支配した。それらの地域に6都護府を置く。多数の外国使節が訪れる長安は、外国人も住む国際都市として栄えた。ササン朝ペルシアと境界を接し、ペルシアの文物が流れこんだ。君たちは、ペルシア人の乗ったらくだの焼き物を見たことはないかい？ 唐三彩と呼ばれる色鮮やかな焼き物が、唐の国際色ゆたかな文化を物語る。唐の東には新羅と日本の律令国家ができて、以後の東アジアで、中国・朝鮮・日本の3国が関係をむすびながら歴史を歩む。

唐の学芸は、南朝の漢人社会がつくり出した六朝文化をひき継ぐ。儒学や歴史学の新しい書物が書かれた。李白・杜甫・白居易などが現われて、中国の詩を高めた。文章の古文への復帰運動が起こり、短編小説が生まれる。絵画でも進展があり、のちの画風を方向づけた。個性的な書法を生み出した書家たちが登場する。仏教思想を深める僧が現われ、日本にも伝わる諸宗派をおこす。三蔵法師は、1300巻あまりもの経典を翻訳した。義浄は玄奘を慕い、海路をとって仏教を求める20年をこえる旅に出た。道教の建物が建てられ、ネストリウス派キリスト教など西の宗教まで伝来した。政治的な安定が、中国文明の一つの盛り上がりをもたらしたことが分かる。

生活面では、華北で小麦の栽培が主流になり、小麦粉でつくる食品を食べるようになった。麺類は中国の工夫だろう。イタリアのパスタの起源は中国にある。テーブルやイスを使うことも一般的になった。古くは床に座り、正式には正座したのだ。

太宗の次の高宗のとき、ライバルに勝って皇后になった武后は、高宗が死ぬと権力をにぎり、国の名を周として都を洛陽に移す。則天武后である。中国でただ一人皇帝になった女性だ。彼女が死ぬと、高宗と同じ墓に入れられたが、その墓誌には最初何も刻まれていなかったそうだ。唐王朝に返り、都は長安にもどる。次の次の皇帝が玄宗である。前期はわりあい安定した時期で、開元の治と呼ばれる。玄宗皇帝の末に登録された戸数は 900 万戸、人口は 5200 万あまりだったそうだ。

しかし、府兵制がうまく働かなくなり、募兵制にして雇い兵で軍を組織するようになっていた。大軍をひきいて辺境の守備に当たる節度使が、半自立的な力をにぎるようになる。イスラーム帝国とのタラス河畔の会戦で敗れた。この衰えのきざしの中で、755 年、節度使の安祿山と部下が反乱を起こす。玄宗の長安脱出という混乱した事態になる。反乱が治まったあとでは、登録された戸数と人口はうんと減る。税の徴収からもれた人々が多く出たのだろう。

780 年には、税収を確保するために、税の制度を変更した。実際に耕作している農民の土地所有を認め、農地の

面積と生産力に応じて課税する。しかし、地方では節度使などが軍閥化して、集めた税を中央に送らないなど自立の傾向を見せるようになる。宮廷では宦官が権力を左右して、支配が乱れる。唐王朝は、衰退への道を歩み始め、華南をおさえてようやくしのぐ状態だった。

五代十国

800年代中頃には混乱をおさえきれなくなり、875年、王朝の専売品である塩の密売人が乱をおこし、動乱が広がった。反乱の武将であった男が唐朝に寝返り、運河のかなめにある今の開封(かいほう)の節度使にしてもらう。その地の経済が男を助け、群雄を圧倒して唐朝第一の実力者になる。907年、男は自分の立てた唐朝最後の皇帝から帝位を奪った。しかし各地に対抗する勢力があり、中国は分裂状態になる。華北では五つの王朝が交代し、そのほかの地域には七つもの国が並び立つ。交代したのを数えると合計10国。これらの国々の支配者は、それまでの貴族と違い、盗賊などさまざまな身分から出て、軍閥をつくることに成功して権力をにぎった。

ふたたび闘争の時代になったが、中国は時代の変わり目にあった。東晋以来華南の生産力は増大し、華北を上回るほどになっていた。各地域で経済が発展し、人口は登録数以上に増加していたのかもしれない。並び立った国々は領域国家のように見える。それぞれが経済発展に力をそそぎ、全国的な経済活動もさかんであった。

B. 日本列島の古代後期

300 年代から 900 年代までの世界の歴史を見てきたけれど、その頃の日本列島で、君たちの先祖はどんなことをしていたのだろうか。ユーラシア大陸のさいはての島国で、まんざらではない文明に至ったのだ。

晋を異民族が倒した事件は、中国だけに閉じるものではなかった。魏が朝鮮半島に置いた楽浪郡と帯方郡も、北の高句麗(こうくり)と南の韓によって吸収される。高句麗は中国に近く、北朝から官位をさずけられている*)。韓の百済(くだら)は高句麗に対抗するほどで、南北の中国王朝に朝貢*)した。414 年に立てられた高句麗の広開土王碑には、百済が倭とむすんで高句麗と戦ったことが書かれている。倭は、高句麗・百済と同じぐらい発展した状態だったと考えられる。新羅はその頃まだ劣勢だった。

魏と晋に朝貢した倭は、南北朝の時代になってもずっと南朝に朝貢した。百済が北朝側にも朝貢したことと違いを見せる。晋が南に追われても倭の使節が行った、と『晋書』に見える。400 年代、次の宋へ五人の倭王が使節を送った。広開土王碑に書かれた情勢の中で、中国からの権威づけと、朝鮮半島への軍の派遣を正当化するねらいがあったようだ。王は安東將軍・倭国王の称号をもらい、配下の者たちも將軍や郡太守の官位をもらっている。

*) 朝貢というのは、中国の王朝から見て臣下の礼をとって使節が来ることで、皇帝は中国の官位や多くの返礼品を与えた。

五人目の倭王武は、478 年「使持節・都督・倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事・安東大將軍・倭国王」の号を得た。ここには、南朝へ朝貢していない新羅の名が入っていて、朝鮮半島南の沿岸部や新羅の支配をねらっているようすがうかがえる。上表文には、「120 国を服属させ、海を渡って 95 か国を平定した」と書かれている。おおげさな書きぶりに見えるが、高句麗を意識したものだだろう。倭は、宋のあとの斉や梁にも使いを送っている。

この外交は、倭が、東アジアで高句麗・百濟などと互角に渡りあおうとしているようすを教える。中国のことをよく知っていたこと、漢文を書ける人間がその宮廷にいたことを物語る。日本列島の社会は東アジアの情勢から遅れずに発展していた、と考えるべきだろう。実際に考古学的にも、200 年代後半から、大きな古墳がつくられるようになり、古墳時代と呼ばれる新しい時代に入っていた。鉄器が使われ、大規模な土木事業がおこなわれるようになった。水田耕作が発展したと考えられる。

ところが、『日本書紀』は、中国との外交という国家にとって重要なことを書いていず、王の系譜も『宋書』に出る五王と一致しない。日本列島の 400 年代までの歴史を『日本書紀』だけで解釈することはむづかしい。

600 年、倭は、倭(たい)国という名で『隋書』に登場する。姓は阿每、名は多利思比孤という王が、607 年、隋の煬帝に国書を送ったと記されている。国書の先頭に「日出ずる処の天子、書を日没する処の天子に致す」とある。

この文は、南朝に高い官位を希望していた倭が、北朝から出た隋に対等な関係を要求したものだ。中国の情報をよく知っているのに、中国を統一した隋帝国との現実の力関係を無視した国書だ。隋を撃退した高句麗さえ要求したことのないこの名分論の起草者の中には、ひょっとすると、南朝からの亡命者がいたのかもしれない。煬帝は怒ったが、翌年使節を送る。使節は倭王に会った。

ところが、王は男性で後宮があるという内容が、『日本書紀』の記述と一致しない。誇らしげに書いた国書も『日本書紀』に記されていない。600年代、大和(奈良県)の王が外交権をもつ王だったのか、疑問が残る。

640年代、『日本書紀』に「大化の改新」と呼ぶできごとが書いてあり、大化という年号が出ている。しかし、年号の制定についてはっきりせず、ひき続いて年号を使用したという記述がない。当時、朝鮮半島の高句麗・百済・新羅はみな年号を使っていた。その三国と競争していた倭が年号を制定していなかったということは理解しにくい。年号制定権はどうなっていたのか、疑問が残る。

唐は、半島の北から高句麗を討つことに失敗していた。そこで、黄海を渡って百済を攻める戦略に変えて、660年、新羅とむすんで百済をほろぼした。再興をめざす百済の人々は倭の援助を求め、663年、百済と倭の連合軍が白村江で唐と新羅の軍と戦う。だが百済と倭の軍は敗け、海戦でも倭の船の多くが焼かれた。唐と新羅の連合軍は、668年、高句麗もほろぼした。まもなく新羅が朝鮮半島を

領有することになるが、唐に臣下の礼をとり、唐の年号を使うようになる。東アジアでのこの激動と倭の敗北が、倭に重大な影響を与えないはずがない。

この点について、何度かその使節が来た唐の見方は無視できない。『旧唐書』は、「日本国は倭国の別種なり。その国日辺にあるを以て(もって)、故に日本を以て名とす。あるいはいう、倭国自らその名の雅ならざるをにくみ、改めて日本となすと。あるいはいう、日本は旧小国、倭国の地を併(あ)わせたり」と書く。

さて、ここまで、教科書に書いてある日本史の解釈を話さなかったことに注意してくれたまえ。おじいさんは、中国の歴史書が日本国のでき方についてほっておけない問題を証言していると思うので、その点を話したのだ。

日本国の誕生

確実なことは、701年、大和の政権が年号を大宝と定め、全国に令(法律)を施行したことである。律(刑法)も施行する。度量衡を定め、諸国の長官を指名し、行政制度を整えていく。ここで、「日本国」が正式に誕生したのである。これ以後は、日本と天皇という呼び名を使おう。

710年、都の平城京(奈良)がつくられた。奈良朝は、唐の律令体制をお手本に、新しい国づくりを始めた。唐の均田法をまねた田畑の分配(班田)がおこなわれる。ただし、700年代には実施できたようだが、800年代になるとこの制度はくずれたらしい。水田の開発を奨励する法がつくられ、やがてそれは私有地への抜け道になる。銅銭も鋳

造された。新しい国にふさわしく、領土を拡大していく。今の鹿児島県とその南の島々が支配下に入り、東北地方に拠点の城が築かれて軍が派遣された。征夷大將軍という役職は、奈良時代に始まったのだ。その頃の日本国は、琉球を含まず、今の宮城県と山形県までだった。

新たな活力にあふれた時代だった。唐のめずらしい文物が輸入され、天平文化と呼ばれる新しい文化が生まれる。東大寺や大仏などがつくられ、それ以前にはなかったほどの建造物が建てられた。唐から来た鑑真和尚の唐招提寺や薬師寺など、奈良のお寺に造形の美しいものがあるね。仏像も日本人の感性を表現したものになっていく。歌人の柿本人麻呂や、貴重な『万葉集』を編集した大伴家持の名を忘れてはいけなだろう。日本人の漢詩を集めた詩集まで残されている。

政治では、宮廷での権力争いが激しかった。「大化の改新」で天智天皇につき従った藤原氏が、急速に力をにぎり、皇族や古い氏族との勢力争いが起きた。皇位継承で血も流れた。皇位をかすめ取ろうとする者まで現われる。奈良朝は、天智天皇の弟の天武天皇が天智の子を倒して成立したが、770年その血統が絶える。数え年62歳の太皇太后で天智天皇の孫にあたる人が、かつがれて天皇位についた。

平安時代

その子が桓武天皇である。若いとき中位の官人だったという経歴をもち、自分の意志で独裁的に権力を行使し

た。奈良にあった旧勢力や寺社などの束縛を断ち切るために、都を奈良の外へ移す。794年二度目につくった都が平安京、つまり、長く首都となる京都である。平安時代と呼ばれる時代が始まる。

新しい律令国家の余韻があった。奈良時代以来の東北地方征服に対して、蝦夷(えみし)と呼ばれた住民の反抗が続いていたので、坂上田村麻呂が遠征した。征夷大將軍に任命される。先祖は朝鮮半島から来た漢族らしい。天智系の天皇をかついだのは藤原氏であった。平安京へ移ってから続く政変で、敵対する氏族を押しつけていく。藤原良房が、妹の産んだ皇子を天皇位につけることに成功する。初めて皇族でない身で太政大臣になり、娘の産んだ子を天皇にすると、摂政に進む。のちの藤原氏が摂政や関白になる前例ができた。800年代中頃のことである。ただし、800年代後半には、対抗する天皇とそれを助ける勢力がいた。右大臣に登用された菅原道真が太宰府に流された事件は、そういう情勢の中でのことだ。

土地所有と税がどのようなであったかについては、しろうとおのじいさんにはよく分からないが、土地制度は変化して、班田はなくなっていく。貴族や寺院などの荘園が増え、皇室も私的な勅旨田をつくって、公田は減る。租・調・庸の税收はしだいに減少していったようだ。900年代になると、地方政庁が耕作を請け負わせて、税を徴収するようなことがおこなわれたらしい。公田と荘園いずれも、官庁と荘園領主に年貢(ねんぐ)を納める形になっ

ていく。開墾した田畑を荘園領主に名目的に寄進し、租税を逃れる者が出る。在地の寄進者や有力者は、土地の実際の管理権をにぎって、勢力を築いていく。

中央政府による地方の支配はゆるんでいく。930年代に平将門の乱が起きた。数か月間だが、関東地方の国司を任命し、天皇に対抗して新皇と名乗った。その反乱を知った藤原純友は、瀬戸内海で規模の大きな海賊行為に出た。瀬戸内海には、すでに以前から海賊が現われていた。物資の流れが相当なものになっていたことを物語るのだろう。二つの反乱は平定されて、また平安にもどる。

みずから政治をおこなう天皇もあったが、藤原氏の娘の産む子がまだ少年のうちに天皇になることが続き、900年代後半になると、摂政・関白の地位につく藤原氏が実権をにぎった。いわゆる摂関政治である。藤原一族の摂関家は、寄進を受けて多くの荘園の領主になり、経済的にもうるおう。藤原道長のとき最も権力をふるった。

しかし、1000年代後半になると、母が摂関家の娘でない天皇が出たのをきっかけとして、やがて摂関家の権力が衰えていく。荘園の規則を改めて、皇室経済の充実が図られた。白河天皇は、天皇の位をしりぞいて上皇(出家して法皇)となったのち、天皇が交代しても実権をにぎった。1100年を過ぎると、上皇は寺をつくったり、和歌集をつくらせたり、いよいよ独裁的にふるまった。地方官庁の責任者である受領(実際には任地に行かない)など上級貴族でない人々が、上皇の御所(院)の近臣として政治を支

える。院の北の詰め所には武士(北面の武士)がいた。それらの武士は郎党(従士)を従えていたので、京都では強い軍事力となる。以後、天皇位をしりぞいた上皇が政務をとる院政が、朝廷の政治体制になった。

歴史を現代からふりかえると、奈良・平安時代は長く続いた。土地制度の変化にしても、政治体制の変化にしても、とてもゆるやかだったように見える。イギリスとくらべて大陸から遠く、外敵による侵入がなかったことが大きな要因だろう。政治体制を変えるほどの戦争も長いあいだなかった。昔から続く伝統を尊重する人間の気持ちは、社会で実際に力をもつ。

平安文化

奈良時代に中国文明を全面的にとり入れ、平安時代は、さらに消化して日本化した時代である。今では日本人があまり気づかないけれど、生活と文化のなかに見分けのつかないほどに溶けこんでいる。海外の文明に敏感だという体質が、日本人にしみこんだように見える。

遣唐使で人が中国に渡り、文物もたくさん入ってきた。高名な最澄と空海は、同じ年の遣唐使船で唐に渡り、仏教の新しい潮流である密教を日本にもたらした。しだいに皇族や貴族出身の出家者が、大きな寺の位の高い僧になる。特に、最澄が比叡山に建てた天台宗の延暦寺は、京都に近いこともあって、歴史に影響を与えるほどになる。空海は、京都に東寺を建てたが、高野山に金剛峰寺を置いた。密教が仏教以前の祈祷(きとう)とむすびついて、

祈祷の風俗が続き、神仏の混ざり合いが生じた。大学がつくられ、儒学の学習が始まる。当時正式な文章は漢字だけで書いたから、漢字でない文字を仮名という。

和歌の伝統が強められたのも、日本でも漢詩をつくることが教養のようになったことと関係しているのだろう。漢詩集と和歌集が朝廷の命でつくられた。『古今和歌集』の序は仮名で書かれているが、なかなかの意気込みだ。宮廷に集まる女性たちの中でも、文学的な作品が生まれた。紫式部の『源氏物語』は、世界の小説の中でも古いけれど、人間心理をよく表現してすぐれたものだ。清少納言の『枕草子』なども、知的な女性の存在を教える。日記文学や物語集・説話集がつくられた。遅れて文明に参加した地域としては、りっぱな成果である。戦争のない京都で、精神文化が洗練されたと言いうことができるだろう。おじいさんは、君たちに、将来日本の古典文学に親しんでほしい。きっと君たちを豊かにするはずだ。

中国と日本のものが溶けあった生活文化は、中国の影響が強いけれども、細部に日本人の感性が現われる。貴族の寝殿造りは高床式で、中国とは違う。そういう少数の貴族の邸宅とは別に、庶民の住居は初めのうちは竪穴式だったようだが、しだいに柱と梁(はり)で組み立てる平屋になる。壁を板や土で囲うようになると、窓もつけることができる。女性も男性も左えりを上にする衣服は中国式だが、ファッションは唐風からしだいに離れていく。